
退魔師と災厄の壺

加倉千早

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

退魔師と災厄の壺

【Nコード】

N8744P

【作者名】

加倉千早

【あらすじ】

結界が張られている「暗い森」を抜けて、プリンシア王国に旅人が訪れた。プリンシアの民とは異なる姿をしたその旅人は、嵐の到来を予言した。旅人の目的とは？ 王朝の秘事が今、解き明かされる。

【作品番号31】

第1話

収穫の季節が近付いていた。感謝祭には豊作を祝う舞が奉納されることだろう。用水路を掘る作業に従事しながらも、男は好天に感謝した。春先に生まれた息子も元気に育っている。何もかもが恵まれた年になりそうだった。

プリンシア王国。三方を山に囲まれた小国である。西には「暗い森」がどこまでも続いている。異国の民が訪れることはなかった。

異国の民は瞳の色さえ違うと聞くが、自分の目で確かめなければ信じがたい話だ。単なる御伽噺なのかも知れない。瞳の色が違うなど、まるで魔物のようなではないか。さぞかし恐ろしい形相をしているのだろう。

「何をなさっているのですか？」

不意に、柔らかな声が降り注いだ。旅人だろうか。頭巾を目深に被っているが、口許は微笑んでいるようにも見えた。ずいぶんと白い肌だ。まるで、ずっと日差しを避けてきたかのような。

プリンシアに点在する十二の遺跡を巡る旅が流行っていると聞く。正しい順序で巡ると幸運が訪れるという話だった。その最終地点が、王都の近くにある。若い旅人も珍しくはなかった。

「見て分らんかね。用水路を掘ってるんだよ。こういう工事は雨が少ない時期にやらなきゃならねえんだ」

「でも、もうじき嵐が来ますよ」

「いい加減なことを言って大人をからかうもんじゃない。こんなに晴れているだろう。この天気、あと十日は続くだろうぜ。だいたい、こんな時期に嵐なんか来られたら作物は壊滅だ。これからが収穫の本番だって言うのによ」

さすがに手を休め、改めて旅人を見遣った。ちょうど、息抜きをしたいと思っていた頃合いでもあるのだが。

「それなら収穫を急いだほうがいいと思います」

「だから、嵐なんか来るかよ。今、急いで収穫したら、収穫量が減っちゃうだろうが。特に葡萄なんてよ、慌てて収穫なんかしたら味まで変わっちゃうんだよ。この辺りの畑で取れる葡萄は、王様に飲んで貰う葡萄酒になるんだぜ。半端なもんは造れねえ」

徐々に人が集まってきた。工事に携わっている者の多くが、何に引き寄せられたのかゾロゾロと。どうやら一息つく口実を作ってしまったようだ。その中には、工事の現場指揮を担当している王太子レオルプの姿もあった。

たまに悪戯っぽい笑みを浮かべる十八歳だが、しっかりしている。まず、作業工程に無駄がない。見習いとして十四歳の頃から現場をウロチヨロしていただけのことはある。それ以上に、柔軟な対応が目についた。現場の声を、とにかくよく聞くのだ。彼の下で働いた者は口を揃えて、いい王になるだろう、と言った。

ちょっとした騒ぎになっているようだった。原因は、白い頭巾と

外套を纏った旅人か。足許の汚れ具合を見ると、長旅であることが窺える。しばらく雨は降っていないから、最東端の村から歩いてきても、そんなには汚れないはずなのだが。大人の脚で五日の行程である。最西端の村なら三日で着く。

レオルプは、遠巻きに眺める男の肩を叩き、輪の中心へと歩を進めた。周りから、若、と聞こえる。昔は「レオ坊」だったことを思えば、ずいぶんな昇格だ。文句は言うまい。

「何を揉めてるんだ？」

「あ、若。いえね、この子が嵐が来るなんて言うんですよ。まあ、子供の言うことなんで、気にしないでやってください」

「子供？」

確かに小柄だ。周りの男たちと比べると頭ひとつくらいは違う。

「おい、若の前では被り物は取りなさい。この方は、レオルプ・ラル・ルパルナイ王太子殿下だ」

男が、レオルプを紹介した。その通りなのだが、畏まられることに慣れていない所為か、居心地が悪い。水道局の副長官という肩書きすら、まだ少し重荷に思えた。いつか王になったら、どれほどの重荷を背負うことになるのだろう。

「失礼いたしました」

振り向いた旅人の所作が、妙に洗練されているように思えた。その小さな違和感も、頭巾が取られたことで消し飛んだ。

陽光を受けて輝く金色の髪だった。瞳も、金色に近い山吹色。なんとなく色彩だろう。これが、人の持つ色だろうか。美しいとさえ思える。しかし、異端者だ。

瞬く間に動揺が周囲に広がる。無理もない。プリンシアにはない色だ。異国の民だとすれば、「暗い森」を抜けてきたというか。有り得ない話だ。森には二重の結界が張ってある。幻術結界と破魔結界がプリンシアを外敵から守っているのだ。

「済みません。強い光に弱いので、あまり目を開けていられないのです」

微笑むと、旅人は目を閉じた。

「頭巾を被ってもいい。いや、そうしてくれ。君の風貌は、人目を引きすぎる」

「招かれざる客、というわけですか。承知していましたが、面と向かって言われると……」

旅人の表情が微かに曇った。

「まず、君の名と、どこから来たかを知りたい」

「海兎^{カイト}。西から来ました。森を抜けて」

「どうやって結界を抜けてきたかは、あとで語って貰うことになるだろう。それよりも、この場を収めるほうが先だ。」

「どうして嵐が来ると思うんだ？」

「空を司るもの、鳥や羽虫たちがそう言っています。それに、匂いも」

厄介な話だ。鵜呑みにするわけにもいかず、無視するわけにもいかない。よくよく慎重な判断が求められるだろう。

「分かった。ひとまず屋敷で話を聞こう。君は、日に当たっていると溶けてしまいそうだから」

つい口から出た言葉だった。冗談を言ったつもりはなかったが、海兔の口許が綻んだ。

第2話

小高い丘の上に、ルパルナイ家の屋敷はある。その前を流れる川は、乾季にも豊かな水を湛えている。窓から町並みが一望できる部屋を、海兎と名乗る旅人には与えた。しばらくは逗留して貰うことになるだろう。この有り得ない来訪者の真意を見定める必要があった。

海兎が頭巾と外套を脱いだ。白くて、細い脚が露わになる。顔立ちは少女かと思いがうが、髪を伸ばしていないところを見ると、少年なのだろう。少なくともプリンシアの女たちは、誇らしげに黒髪を伸ばしている。それとも、異国では髪を伸ばす習慣すらないのだろうか。

レオルプは思い切って訊いてみることにした。

「失礼だが、君は男の子か？」

「はい。子という年でもありませんが」

どう見てもレオルプよりは年下だろうが、大人びた振る舞いから察するに、子供扱いされることには抵抗があるのだろう。可愛らしい外見も相まって、なんとも微笑ましく思えた。

さて、どう接したものか。海兎が二重の結界を破ってプリンシアに侵入したことは見過ごせない事実だ。

レオルプは窓の外を見遣った。

「君は、『暗い森』を抜けてきたと言ったね」

「はい」

「森には結界が張ってあった。余所者が森に入っても、ただ迷うだけで、やがては元の場所に戻ってしまう」

「小さな綻びがあったので、そこを抜けてきました」

如何に高度な結界を張ろうと、それが完璧な形で機能し続ける、ということはない。結界が綻ぶことはあるのだ。しかし、その綻びを見付けることは退魔術の心得がなければ不可能だろう。

「君は退魔師なのか？」

レオルプは振り向き、海兎の顔を見据えた。金色にも見える双眸を。

「たぶん、その類です」

海兎が退魔師に類する者だとしたら、よほどの天稟だ。

「つまり君は、結界が張ってあることを承知で、魔物が出るかも知れない森をひとりで抜けてきたということになるな」

「そうなりますか」

はぐらかすように海兎が言った。

「御覧の通り、この国には城壁がない。大軍を迎え撃てるような軍

隊もない。治安維持のための近衛軍があるだけだ。この国を守っているのは、山と森と結界だ。その結界が破られた」

「結界の綻びは修復しておきました」

「そうだとすると、君がプリンシアに害を為す存在でないという保証はない。その外見だけでも人々を不安がらせるのに充分だが、不吉な予言までした。目的が明確でない君を、自由にさせるわけにはいかないんだ」

「はい」

海兎の顔からは笑みが消えていた。無垢な子供から笑顔を奪ってしまったような罪悪感を覚え、レオルプは目を逸らした。

「君の処遇について、最終的には評議会が決定を下すことになるだろう。それまで君は監視下に置かれることになる。とは言え、この屋敷内でなら自由に振る舞ってくれていい。執事には客として遇するよう言っておく」

「ありがとうございます」

海兎の声が微かに華やいだ。

礼を言われるようなことではないのだ。レオルプは左の拳を握り締めた。どうにも居たたまれない。

どう転んでも、海兎は自由の翼を失うだろう。結界を通り抜けられるほどの退魔師を、評議会が黙って帰すとも思えない。海兎は、敵に回せばプリンシアにとって脅威となるのだ。国外追放というよ

うな甘い措置が待っているはずはなかった。

良くて軟禁。悪ければ、間諜か異端者として始末される可能性も全くないわけではない。

王太子といえども、レオルプには七人評議会に意見するだけの発言権は認められていなかった。肩書きは飽くまでも水道局副長官でしかないのだ。

「私は仕事に戻る。夕刻には帰れると思う。何か言いたいことは？」
自ずと事務的な口調になった。自然に振る舞っている自信もなかった。今の自分を遠目から見られるなら、さぞかし滑稽だろう。

「収穫を急いだほうがいいと思います」

「嵐は本当に来るのか？」

「九分通り」

「残り一分は？」

「神のみぞ知る、です」

「君は、作物の心配よりも自分の心配をしたほうがいい」

レオルプは、海兎の顔を見ずに部屋から去った。

第3話

いつもより早めに仕事を切り上げ、レオルプは屋敷に戻った。仕事中も海兔のことを考え、落ち着かなかった。評議会への報告は執事に任せてしまったが、自分で行けば良かったと後悔もした。ほんの少しでも評議員の心証を良くすることは出来たはずだ。

海兔は、どうしているだろう。何を話せばいいか思い付かなかったが、ひとまず顔を見ておきたいという衝動に駆られた。

「お帰りなさいませ」

いつも出迎えてくれる召使いとは明らかに違う声が、二階から響いた。その鮮やかな刺繍が施された衣装は、忘れもしない、亡き母が普段着として着用していたものだった。

そこには、頭から足の先までプリンシアの衣装に身を包んだ海兔の姿があった。着こなしも自然で、気になる点があるとすれば、金色にも見える山吹色の瞳くらいか。髪は帽子で隠せるので、遠目にはプリンシアの民と見まがうことだろう。いや、レオルプは母と見まがった。背格好が、ちょうど同じなのだ。だから、驚きを隠せなかった。

レオルプは、海兔が階段を駆け下りてくるまで啞然と立ち尽くした。

「その格好」

「服が汚れていたので、召使いの方が洗ってくださったのです」

海兎が嬉しそうな笑みを浮かべた。その笑顔が、母の面影と重なった。顔立ちは全く似ていないのに。母も、無邪気に笑う人だった。

「それは、母上が着ていたものだ」

動揺しているという自覚はレオルプにもあった。それを気付かれまいとするが、軽妙な言葉は思い付かなかった。似合っている、と言えはいいのだろうか。しばらく思いを巡らせていたら、なんとなく逸機して何も言えなかった。

レオルプの言葉を噛み砕くまで少しの間を置いてから、海兎の顔が青ざめていった。

「ごめんなさい。すぐに脱ぎます。私に合う服がこれしかないと思ったので――」

「いや、そういうつもりで言ったわけでは、ない。気にしないでいい。本当に。もし、君さえ気に入ってくれたなら、その衣装を貰って欲しい」

「宜しいのですか？」

「ああ」

それにしても、誰が海兎に母の衣装を着せたのだろうか。

「レオルプ」

威厳のある低い声が、波のように広がった。レオルプの父でもあ

るプリンシア王が、ゆつくりと階段を下りてくる。

「父上、今日はお早いんですね」

「珍しい来客と聞いて、早々に切り上げてきた。夕餉は海兔殿も交えよう」

確かに珍しい来客ではあるが、多忙な王が仕事を差し置いてまで接待するほどの相手ではない。海兔が間諜である可能性が否定されたわけでもないのだ。

しかし、父の嬉々とした様子を見るに、海兔の来訪を心から喜んでいるかのようだ。

「父上、どういいうおつもりですか。まさか、母上の衣装も父上が？」

「不服か？」

「いえ、そういうわけではありません。ただ――」

意外だった。

「海兔殿は旧知だ。其方が生まれる前からの」

「冗談はやめてください」

「私が冗談を言うように見えるか？」

「珍しくありません」

「ならば、私が見ず知らずの旅人に妻の形見を与えたりすると思うか？」

「それは――」

言われてみれば、その通りだ。しかし、そんなはずがない。海兎は、どう見ても十五、六歳。いくら年を誤魔化しても二十歳は超えていないだろう。ならば、生まれたばかりの海兎を知っているという意味か。

「海兎殿は長い時間を眠って過ごす。短ければ一冬。長いときには何年も。国境の結界は、そもそも海兎殿が張ったものだ。そのとき海兎殿から教えを受けた退魔師は、疾うに亡くなっているが」

父が、海兎の肩を優しく抱いた。その父を見つめる海兎の眼差しは、どこか懐かしそうでもある。

二人を見ていると、父の言葉に偽りがあるようには見えない。もし、父の言葉が本当なら、海兎はプリンシアに安寧をもたらした救世主ということになるが。

「その話を信じてもいいのですか？」

「いかな」

「は？」

レオルプは訝ったが、父の顔は真剣そのものだった。

「信じるのではなく、見極めろ、と言っているだろう。王になるた

めに必要なことだ。私が明日倒れたら、なんとする？ 其方は何を頼りに国をまとめていくつもりだ？」

いずれ王になるとしても、まだ先のことだと思っていた。頑健な父のことだ、あと二十年は大丈夫だろう、と。だから、レオルプは父の側で少しづつ仕事を覚えていけばいい、というくらいにしか考えていなかった。現実感が、ない。

「私には、まだ荷が重いようです」

「重くても背負え。其方が背負わねば国が割れる。内乱だけは絶対にあってはならんのだ」

「理屈は分かりますが、その、なんというか、感覚が伴いません」

「なぜだか分かるか？」

「いいえ」

「それは、己を知らぬからだ。尤も、其方の年で己を知っている者などおらんだろうが」

父の柔和な表情が、小難しい話が終わったことを告げている。いつも唐突に小難しい話をする父だった。

レオルプは大きく息をついた。夕餉か。海兔を見遣ると、優しげな微笑みが返ってきた。釣られてレオルプも頬を緩ませたが、同時に重大なことも思い出した。

「評議会が海兔を取り調べることになっているのですが」

「報告したのか」

「はい」

「律儀というか、相変わらず堅苦しい奴だな」

「父上とは違うので」

「其方には多くを背負わせているが、その律儀さは下ろしてもいい荷だ。まあ、良い。明日にでも私から手を回しておこう」

「お願いします」

レオルプは、やっと肩の荷が下りたような気がした。そして、やっと夕餉だ。空腹も思い出した。

第4話

プリンシア王ピラールには、海兔が二十年ぶりに訪ねてきた理由も分かっていた。海兔は、二十年前の約束を果たそうとしているのだ。それは、ルパルナイ王朝の秘事に関わる約束だった。

皆が寝静まった頃を見計らい、ピラールは庭に出た。満月が辺りを優しく照らしている。

楡の木に寄り掛かるようにして、海兔が待っていた。同じだ。総てが同じだった。二十年前の満月の晩も、こうして海兔と会っていたのだ。誰にも知られず、二人だけで。

「変わらないな」

ピラールは笑みを浮かべた。

海兔は二十年前と全く変わらない姿で、やはり二十年前と同じ悲しげな笑みを返してきた。

「あなたも」

「もう若くない。器としても限界だ。そうだろう？」

「はい。あなたほどの大きな器でも、絶え間なく水を注げば、いつか溢れます。天寿よりも遥かに早く終わりが訪れることを分かっているが、どうして平然としていられるのですか？ あなたが、あまりにも変わっていないかったので、私は驚きました。もっと、疲弊していると思っていたのに」

「海兎殿との約束があったからな。少なくとも、死ぬ前には海兎殿に会える。それを、疑いもしなかった。いつも、私の心は穏やかだったよ。自分が何をすべきか分かっていたから。どうだ、この国は？」

「間違えました。二十年で、よくこれだけの……」

海兎の頬を、光るものが伝った。泣いているのか？

「悔いはない。この国が、私だ」

ピラールは両手を広げた。天を仰いだ。陰りのない月が、賛辞しているようにも思えた。

「答えは、あのときと変わりませんか？」

「ああ」

「分かりました。あなたが引き受けていた災厄を、総て浄化します。これによってプリンシアにも災厄が降り注ぐことになるでしょう。しかし、それが本来の姿でもあります。揺りかごの時代が終わっただけのことです。これから先、プリンシアの民は自らの足で歩いていかなければなりません」

「未来は、子供たちに託そう」

ピラールは腰を落とし、目を閉じた。最後の晚餐は、本当に楽しかった。先に逝った妻の肖像画が見守る食卓で、息子と、海兎と、夕餉を楽しんだ。これ以上の贅沢を、知らない。

「始めます」

呪文の詠唱が始まった。

海兔の声と、満月の光が、ピラールの感覚の総てとなった。

第5話

朝靄の中で、レオルプは楡の木に寄り掛かっていた父を見付けた。既に事切れていた。その死に顔は穏やかで、苦悶の色は一欠片も見えて取れなかった。

外傷はない。毒を盛られたならば苦悶の表情が浮かんでいるはずだ。そうになると、殺されたわけではないようだ。しかし、自然死として片付けるには不自然すぎる。なぜ寝室ではなく、庭で死んでいたのか。

考えてみれば、昨晚の父は、どこか少し変だった。なぜ急に「私が明日倒れたら」などと言いつ出したのだろう。或いは、そのとき既に死を予感していたのか。

次から次へと湧く疑問が、レオルプに悲しみを与えなかった。

葬儀の手配を執事に任せ、レオルプは父の書斎に足を運んだ。何か、手掛かりを残しているはずだ。遺書でも見つければ、話は早い。

机の上に、それらしきものはなかった。次に、筆筒の引き出しを漁る。古い訴状が、ぎっしりと詰まっていた。これを律儀というのだ。裁判記録としては、書記の手で書かれたものが残るので、訴状そのものは判決が下された時点で焼き捨てられるのが普通だ。にもかかわらず、父は下手くそな字で書かれた訴状まで個人で保管していたというのか。

扉を叩く音が、レオルプを現実に戻した。少し感傷的になっ

ていたことに気付く。

「レオルプ様、いらっしゃるのでしょうか？」

海兎の声だった。

「開いている」

扉が、ゆつくりと開かれた。

「お話があります」

悲しみに暮れるわけでも、取り乱すわけでもない、海兎の何かを秘めたような眼差しが、レオルプを静かに射貫いた。

「聴こう」

望むところだ。海兎が何かを知っているならば、語って貰う。レオルプは逸る気持ちを抑え、父が愛用していた椅子に浅く腰掛けた。

ゆつくりと部屋に足を踏み入れた海兎が、後ろ手に扉を閉める。

嵐は、まだ来ていなかった。

「最初に、ルパルナイ王朝繁栄の秘事を、話さなければなりません。本来なら、ピラール様から直々にレオルプ様へと語り継がれるべき事柄ですが、どういうおつもりか、ピラール様はその任を私にお与えになったのです。ピラール様にとっては終わったことだったからなのかも知れません。記録に残っていないので正確な始まりはピラール様も御存じなかったようですが、ルパルナイ王朝は何代も前から、繁栄のために生け贄を捧げてきました。災厄の壺、と呼ばれる

儀式です。災厄を呼び寄せる体質の者は、本来なら他に降り注ぐべき災厄をも呼び寄せてしまいます。より大きな不幸を、ひとりで背負う羽目になるのです。しかし、そのような者は滅多に現れません。現れたとしても、早死にすることでしょう。儀式を考えた人間は、人為的に災厄を呼び寄せる術を見いだしました。災厄が災厄を呼ぶならば、敢えて災厄を溜めておけばいい、と。そして、器から器へ水を移し替えるように、災厄を移し替えるということです。災厄の壺となる人間は、なるべく器の大きい子供が選ばれました。その家族にも、事実には伝えられません。神隠しにであったと思い、諦めて貰うのです。災厄の壺とは、ひとりがプリンシア全土の災厄を引き受けることによって、プリンシアから大きな災厄を取り除くという儀式でした」

「そんなことをしたら、その子供は長生きできず、不幸なまま死ぬことになるのではないのか？」

さすがに憤った。おぞましい話だ。

「はい。大抵は、災厄を移し替える儀式のさなかに命を落とします」

「そんな馬鹿げた話が、ルパルナイ王朝の秘事だというか？」

「ですから、ピラール様は、代々受け継がれてきた儀式を御自分の代で終わらせることにしたのです。しかし、ピラール様が即位された頃のプリンシアは、まだ貧しく、等しく災厄が降り注ぐことになれば、国そのものが傾きかねませんでした。そこで、ピラール様は自らを災厄の壺とされたのです。私は、ピラール様の器を見て、二十年は持ちこたえられるだろうと判断しました。すると、ピラール様は、二十年もあるのか、と喜ばれました。私は、ピラール様の命が削られていくことを承知で、儀式を行いました。そして昨夜、災

厄を浄化する儀式のさなか、ピラール様は命を落とされました」

話し終えると、海兎は大きく息をついた。

「何を信じていいか、分からなくなってきた。私たちが享受してきた幸せは、報われることのない犠牲者の上に成り立っているというのか。この目で見えてきた世界は、本来の姿ではなく、人為的に歪められたものだったというのか。何を得て、何を失ったのか。私は、どうすればいい？」

「すぐに答えを出す必要はありません。ただ、王として生きることだけはお選びください。ピラール様はそれをお望みになりました。レオルプ様、どうか王道を――」

「しばらく、ひとりにになりたい」

全身が重くなるような疲労感に襲われていた。自分が、何を背負っているのかも分からない。しかし、重みで押し潰されそうになる。なんだ、この重みは。

レオルプは右手で顔を覆い、ゆらりと立ち上がった。覚束ない足取りで、自室まで戻ったことは覚えている。それから夕刻までの記憶が飛んでいた。

第6話

まるで王の死を悼むかのように、季節外れの嵐がプリンシアを襲った。王の通夜が行われた晩のことだった。翌朝には何事もなかったかのように晴れ渡ったが、多くの作物が壊滅的な被害を受けた。

せめてもの救いは、海兎の忠告を聞き入れ、穀物を中心に収穫を早めさせていたことだろうか。

しかし、その海兎が災いを運んできたのだという噂が流れた。王の急逝とも重なるだけに、噂には尾ひれが付き、『金色の魔女』に仕立てられた状態でレオルプの耳にも届けられた。そうになると、評議会も黙ってはいない。民衆の疑念に応える形で、迅速な動きを見せた。海兎は、評議会の取り調べを受けることになったのだ。

即位式の日取りは決まっていなかったが、レオルプには既に王の権限が与えられていた。従って、王として評議を見守ることも可能ではあった。しかし、職務の引き継ぎに忙殺され、それどころではなかった。しかも、通夜には間に合わなかった遠方の有力者たちが、ひっきりなしに訪れ、見舞いの言葉を述べていく。これが数日は続くだろう。

海兎に関して、レオルプが助力できることは少なかった。

日が暮れ、多くのことから解放されると、レオルプは屋敷に戻らず、海兎が拘束されているという牢獄塔へと向かった。

牢番には劳いの言葉を掛け、レオルプは重い扉を開けた。簡素な寝台に腰掛けていた海兎が、仄かな明かりの中で顔を綻ばせた。

「済まない、海兎。君を守ってやれなかった」

「そんなこと、気になさらないでください」

海兎は気丈に笑みを浮かべるが、立場は相当危ういはずだ。

海兎がプリンシア人とは違う容姿をしているだけでも、異端者として扱われかねない。しかも、結界を破って入国しているという事実もあった。その上で、王の死と、嵐の襲来に関する嫌疑が掛けられている。

「しかし、君を弁護できるとしたら私だけだ」

「お気持ちは嬉しく思いますが、間違っても王朝の秘事を漏らすようなことがあってはなりません。王朝の権威が揺らぎます。それよりも、嵐に備えることは出来ましたか？」

「ああ。全滅は免れた。君のおかげだ、海兎」

「良かった」

良くはない。予言の成就是、却って海兎の立場を悪くするだけだ。

「どうして君は……もっと自分のことを考えないのか？」

「考えていますよ。レオルプ様が私の身を案じてくださるので、嬉しいです」

牢獄には似つかわしくない、嬉々とした笑顔だった。

「君は分かってない。どれほど自分の立場が危ういかを」

「大丈夫です。私が眠っている間にも、私を待っていてくれる人がいました。その人は、二十年前の約束を忘れずに、ずっと待っていてくれたのです。本当は、少し不安でした。昔の約束など、疾うに忘れてしまっているかも知れない。でも、その人は、会うなり私を抱き締めてくれました。だから、大丈夫です」

「そんなの」

言葉が続かなかった。

「そんな顔をなさらないください。お別れが言いにくくなります。いえ、今夜、レオルプ様がいらっしゃらなければ、言わないつもりでした。明日、評議会で私は消えます。消えると言っても、彼らが私を認識しなくなるだけです。そうすれば、牢番に責任が及ぶこともないでしょうから」

海兔が、消える？　そこまでは考えていなかった。海兔がプリンシアの退魔師と異質であることは感じていたが、レオルプが知らない力を他にも隠し持っているということか。底が、全く見えない。ああ、そうか。だから、畏れを抱くのか。

自分は、どうだろう。海兔に対し、畏れを抱いているだろうか。

金色の髪。山吹色の瞳。それが、なんだ。ただ、見慣れていないだけではないか。いや、もう見慣れた。海兔が母の遺品を身に着けていることにも抵抗はない。海兔が気に入ってくれるなら、もつと与えたいと思うほどだ。もし、畏れを抱いているなら、そんなふう

に思うはずがない。畏れは、抱いていないはずだ。

「海兎、行かないで欲しい。どんなことをしても君を守る。だから――」

「簡単に仰有るのですね」

「簡単じゃない。揺らぐことのない決意だ」

「私の決意は、ピラール様の最期を見届けたら去ることです。あなたが生まれる前から決めていました」

「ならば、その決意は無効だ。私と出会ったのだから」

「それは理屈というものです」

海兎が小さな溜息をついた。

「いいや、君が感じる番だ」

レオルプは、海兎の小さな身体を抱き締めた。

言葉とは不便なものだ。想いの半分も伝わらない。それは恐らく、自分が半分も理解していないからだろう。ならば、今だけは衝動に身を委ねよう。王として、最初で最後の我が儘だ。

「私は間もなく眠りに就きます」

「目覚めるまで待つ」

「いつ目覚めるか分かりません」

「君にとっては一瞬だ」

「目覚めたら、あなたを忘れているかも知れません」

「好都合だ。私の嘘を君は見抜けない」

「なんですか、それ」

海兎が笑った。

レオルプも笑った。自分で言っておきながら妙に可笑しくて、海兎から離れても、まだ笑顔が続いた。頬が、痛い。なんだか、ずっと笑っていなかったように思えた。

第7話

大寺院の地下には、身の丈ほどの大きな繭玉がある。その繭玉を巡っては、様々な噂が流れた。中でも、七つの世界を旅してきたピラール王の魂が、プリンシアを守護するために舞い戻ってきたのだという噂が有力だった。繭玉の出現が、ピラール王の死から七日後だったことに起因している。それだけではなかった。毎朝、欠かさず大寺院を訪れるレオルプ王が、地下の繭玉に祈りを捧げていたという目撃談もあった。

噂の真相を確かめるべく、女が王に訪ねた。すると王は、優しい笑みを湛え、こう答えたのだった。

「あの繭玉にはね、私を笑顔にしてくれるものが入っているのだよ。繭が孵る瞬間に居合わせることが出来たら幸運だけど、いつ孵るか分からないからね」

繭が孵る瞬間に居合わせると幸運が訪れるという噂は、瞬く間に広がっていった。

繭玉を目当てに大寺院を訪れる者は日増しに増え、王都は旅人たちでも賑わうようになった。

ある者は、囁くような声が聞こえたという。

ある者は、夢のような世界が見えたという。

そして今日も、繭玉に祈りを捧げる王の姿があった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8744p/>

退魔師と災厄の壺

2011年1月8日12時54分発行